

コロナ禍での アルコール依存症を テーマに議論

厚生労働省

厚生労働省では、アルコールをはじめギャンブルや薬物などの依存症に対する正しい理解を深め、適切な治療や支援に結びつける普及啓発事業を展開している。その一環として、2021年11月15日にアルコール依存症をテーマにしたシンポジウムがオンライン形式で開催された。

シンポジウムでモデレーターを務めた特定非営利活動法人ASRK代表・今成知美氏は、現在のアルコール依存症を取り巻く環境について、調査結果等を紹介しながら、「コロナ禍において家での飲酒が増えるなか、飲酒の頻度も量も増加傾向にある人が一定数いることなどがわかってきた」と説明。また、飲酒に関連する問題として、飲酒運転の検挙数が増えていることをあげ、「家で飲酒したあと、車で（追加の）酒を買いに行く』『自宅で深酒したことが原因で、翌日飲酒運転になってしまう』と

いった理由を見ると、検挙された人のなかには、アルコール依存症やその予備群の人も一定程度含まれているのではないかと述べた。21年度から25年度までを期間とする第2期アルコール健康障害対策推進基本計画では、自助グループによるオンラインのミーティング活動の支援を行うことが掲げられている。今成氏は、「依存症は孤立の病といわれ、回復のためにはつながりが必要。そのつながりをつくるのが自助グループである。コロナ禍で制限があるなかでも、工夫して活動している」と紹介。シンポジウムでは4つのグループがオンラインを活用した実践例を発表した。

大学生が高校で 出張授業を実施 子宮頸がんを啓発

（社福）聖隷福祉事業団保健事業部
学校法人聖隷学園

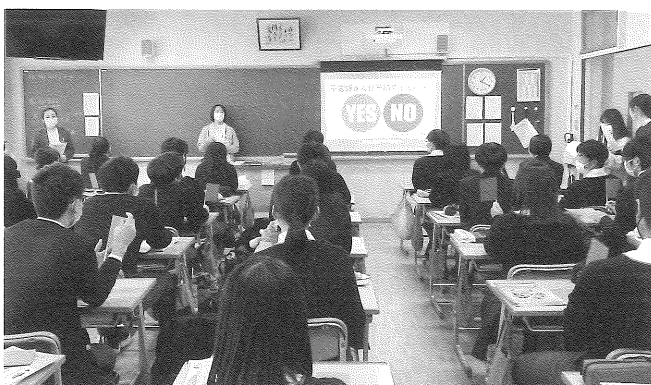
静岡県浜松市の（社福）聖隷福祉事業団保健事業部と学校法人聖隷学園聖隷クリストファー大学は、2019年にAYA世代（15歳から39歳の思春期・若年成人）における婦人科検診の受診率向上を目

的とした学生主体型の啓発プロジェクト「S*G*E♡プロジェクト」を立ち上げた。同プロジェクトは産学官連携のもと、大学生が主体となってがん検診の啓発活動等を行っている。

21年12月には新たな啓発活動を開始。プロジェクトメンバーの大学生が、聖隷クリストファー高等学校2年生の男女約100人に向けて、「子宮頸がんに関するお話」と題して授業を行った。授業を担当した大学生は、同保健事業部の専門医から監修を受けた資料をもとに、子宮頸がんの特徴や、予防のためのHPVワクチン接種や検診受診の重要性等について、クイズ形式も取り入れてわかりやすく報告した。

事前アンケートでは、子宮頸がんについて男子生徒の59・3%、女子生徒の8・6%が「知らない」「よくわからない」と回答していたが、授業後は男子生徒の94・4%、女子生徒の98・2%が「とてもよく理解できた」「よく理解できた」と回答。「20歳になったら検診に行こうと思う」といった感想も寄せられた。また、同高等学校の担当者からは、「同年代の大学生から話を聞くことで、生徒も親しみやすく興味をもって学習が

できたのでは」と好評を得た。当日は、浜松市のがん検診やワクチン接種を所管する部門の担当者も聴講するなど、行政側の関心の高さもうかがえた今回の授業。プロジェクト発起人の一人である同保健事業部総合企画室長・池田孝行氏は、「浜松市では現在、産官をあげたさまざまな取り組みが行われている。その舞台に『学』という将来を担う若いDNAが参画することにより、さらに有意義かつ未来につながる取り組みになることを期待したい」と語った。



大学生による出張授業の様子。子宮頸がんについて高校生の男女が学びを深めた。

* S：聖隷、G：gynecology（婦人科）、E：enlightenment（啓発）に対して♡（愛）をもって行動する